



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

大学生の対人恐怖心性と攻撃性の関連について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太宰,瑞希, 佐野,秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/127857

大学生の対人恐怖心性と攻撃性の関連について

太 宰 瑞 希*・佐 野 秀 樹**

教育心理学

(2011年9月28日受理)

1. 問題と目的

対人恐怖心性は、健常な人にも認められる対人恐怖的な傾向である。木村 (1982)⁹⁾ や鍋田 (1997)¹⁴⁾ は健常な人にも対人恐怖症的傾向が現れると述べている。また、対人恐怖心性は青年期に高くなることが知られている (堀井, 1995¹⁷⁾, 津田, 1998¹³⁾)。

これまでの対人恐怖の要因として考えられていたのは「人に迷惑をかけるのではないか」という加害者意識であった。山下 (1977)²¹⁾ は対人恐怖の特徴の1つに「自分にはまわりに嫌悪感を与える欠点がある」という思い込みがあると述べている。しかし、西村・井上 (2008)¹⁶⁾ によると、「人から馬鹿にされるのでは」という被害者意識も対人恐怖心性に影響しており、逆に相手を馬鹿にすることで存在を必死に守ろうとしていると述べている。このことから、対人恐怖心性の高い人は被害者意識により他者を攻撃する傾向が強いことが考えられる。調 (2004)¹¹⁾ は対人恐怖心性の高い者は強い攻撃性が感じられるがそれを抑圧していると述べている。また、李・永江 (2005)²⁰⁾ は対人恐怖心性と自己愛が攻撃性に及ぼす影響について検討しており、対人恐怖心性と攻撃性に関連を見出している。しかし、これらの研究における攻撃性は他者への攻撃性の側面のみには着目していない。攻撃性については、他者への攻撃性だけでなく他の様々な側面から考える必要がある。

西村・井上 (2008)¹⁶⁾ が述べるように、対人恐怖心性に加害者意識と被害者意識が影響しているのならば、被害者意識により攻撃性を他者へ向けるだけでなく加害者意識により攻撃性を自己に向ける可能性が考えら

れる。岡田・永井 (1990)⁷⁾ や調・高橋 (2002)¹⁰⁾ は、自己評価と対人恐怖心性の間に負の相関が見られることを明らかにしている。その他にも、西川 (2005)¹⁵⁾ は対人恐怖心性と自尊心の間に負の相関が見られることを明らかにしている。これらのことから、対人恐怖心性の高い人は自己への攻撃性が高いことが考えられる。

また、安立 (2001)¹⁾ は攻撃性を自己への攻撃性や他者への攻撃性といった「破壊的な力」のほかに、「能動的な力」があると述べている。能動的な力とは、外界への適応行動を発現させ、自尊心の基礎ともなるものである。先に述べた西川 (2005)¹⁵⁾ の結果から考えると、対人恐怖心性の高い人は能動的な力が弱いのではないかと考えられる。しかし、対人恐怖心性と自己への攻撃性、能動的な力を含めた攻撃性との関連は検討されていない。

従って、本研究の目的は対人恐怖心性と、他者への攻撃性、自己への攻撃性、能動的な力を含めた攻撃性との関連を検討することとする。対象は、対人恐怖心性が高くなると考えられる大学生とする。

2. 方法

研究方法は、質問紙調査法で行った。調査期間は2010年11月下旬～12月上旬であった。調査は、東京都の大学生175名を対象として行った。性別の内訳は、男性84名、女性91名であった。調査の手続きは、大学の授業時間に質問紙を配布し、回答を依頼した。また、筆者の知人に質問紙を配布し、回答を依頼した。

* 東京学芸大学大学院教育学研究科学校心理専攻 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

** 東京学芸大学教育心理学講座 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

3. 調査内容

3. 1 フェイスシート

回答者の性別, 学年の記入を求めた。

3. 2 対人恐怖心性を測定する尺度

堀井・小川(1996¹⁸⁾, 1997¹⁹⁾)が作成した対人恐怖心性尺度から項目を抜粋して使用した。本来は, 自分や他人が気になる悩み, 集団に溶け込めない悩み, 社会的場面で当惑する悩み, 目が気になる悩み, 生きることによって疲れている悩み, 自分を統制できない悩みの6因子構造, 全30項目で構成されている。しかし, 生きることによって疲れている悩み, 自分を統制できない悩みの2因子は対人恐怖心性の直接的な症状ではなく, 症状へのとらわれから生じる2次的な悩みであるため, 今回の研究には適さないと判断した。よって, 自分や他人が気になる悩み, 集団に溶け込めない悩み, 社会的場面で当惑する悩み, 目が気になる悩みの4因子, 全20項目を使用した。「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。

3. 3 攻撃性を測定する尺度

安立(2001)¹⁾が作成した攻撃性質問紙を使用した。対象攻撃行動, 積極的行動, 自責感, 自己破壊行動, 猜疑心の5因子で構成されている。対象攻撃行動と猜疑心が他者への攻撃性に, 自責感と自己破壊行動が自己への攻撃性に, 積極的行動が能動的な力に対応している。全33項目で, 「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

4. 結果

4. 1 項目分析

4. 1. 1 対人恐怖心性尺度

対人恐怖心性尺度20項目の信頼性を検討するために, α 係数の算出を行った。結果, $\alpha = .95$ と非常に高い値を示した。よって, 対人恐怖心性尺度の信頼性は十分といえる。

続いて, 尺度の因子構造を確認するために, 対人恐怖心性尺度20項目に対して主因子法(バリマックス回転)で因子分析を行った。スクリープロット基準および因子の解釈可能性から4因子を抽出した。4因子の累積寄与率は63.2%であった。因子分析の結果, 先行研究とほぼ同じ因子構造を示したため, 因子名は先行研究と同じものを使用することとした。

第1因子は「人と目を合わせていられない」「人の

目を見るのがとてもつらい」など, 視線恐怖に関する項目から構成されていたため, 「目が気になる悩み」と命名した。第2因子は「人がたくさんいるところでは気恥かしくて話せない」「会議などの発言が困難である」など, 社会的不安意識に関する項目から構成されていたため, 「社会的場面で当惑する悩み」と命名した。第3因子は「集団の中に溶け込めない」「仲間の中に溶け込めない」など, 非社会的側面に関する項目から構成されていたため, 「集団に溶け込めない悩み」と命名した。第4因子は「人が自分をどのように思っているのかよく考えてしまう」「他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」など, 自他へのとらわれに関する項目から構成されていたため, 「自分や他人が気になる悩み」と命名した。

4. 1. 2 攻撃性質問紙

攻撃性質問紙33項目の信頼性を検討するために, α 係数の算出を行った。結果, $\alpha = .86$ と非常に高い値を示した。よって, 攻撃性尺度の信頼性は十分といえる。

続いて, 尺度の因子構造を確認するために, 攻撃性尺度33項目に対して主因子法(バリマックス回転)で因子分析を行った。スクリープロット基準および因子の解釈可能性から4因子を抽出した。4因子の累積寄与率は40.1%であった。

第1因子は, 「腹の立つ相手にはいやみとか皮肉を言ってやりたいと思う」「他人のことを心から信頼することはできない」など, 先行研究における「対象攻撃行動」因子と「猜疑心」因子の項目から構成されており, 「対象攻撃性」と命名した。第2因子は, 「他人とのトラブルがあると, 自分を責めるほうである」「不愉快なことでも無理に我慢してしまう」など, 先行研究における「自責感」因子の項目から構成されていたため, 名称をそのまま使用した。第3因子は, 「自分の皮膚をかきむしりたくなることがある」「自分の髪を引っ張ったり, 引き抜いたりしたくなることがある」など, 先行研究における「自己破壊行動」因子の項目から構成されていたため, 名称をそのまま使用した。第4因子は「やりたいと思ったことは行動に移すほうである」「自分のやりたい事に向かって突き進んでゆくほうである」など, 先行研究における「積極的行動」因子の項目から構成されていたため, 名称をそのまま使用した。

表1 対人恐怖心性尺度の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
4. 人と目を合わせていられない	.76	.19	.26	.16
8. 人の目を見るのがとてもつらい	.75	.23	.35	.12
12. 人と話をする時、目をどこにもって行っていいかわからない	.73	.23	.14	.21
16. 顔をジーンと見られるのがつらい	.64	.36	.23	.17
20. 向かい合って仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい	.60	.42	.26	.14
13. 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする	.44	.23	.27	.37
17. 人と会うとき、自分の顔つきが気になる	.44	.21	.11	.29
11. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない	.36	.73	.19	.14
7. 会議などの発言が困難である	.16	.68	.20	.16
15. 大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である	.29	.65	.29	.18
19. 引っ込み思案である	.21	.61	.40	.14
3. 人前に出るとオドオドしてしまう	.30	.58	.26	.24
18. 人が大勢いると、うまく会話の中にはいっていけない	.34	.55	.49	.20
2. 集団の中に溶け込めない	.14	.35	.77	.14
10. 仲間の中に溶け込めない	.31	.24	.69	.18
6. グループでのつき合いが苦手である	.25	.20	.68	.10
14. 人との交際が苦手である	.29	.43	.66	.11
5. 自分が人にどうみられているのかクヨクヨ考えてしまう	.27	.19	.14	.80
1. 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる	.12	.19	.10	.80
9. 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう	.38	.12	.45	.48
負荷量の平方和	3.789	3.451	3.266	2.129

4. 2 対人恐怖心性の高低による攻撃性の各因子の平均値の比較

4. 2. 1 目が気になる悩み

目が気になる悩みの高低による攻撃性の各因子の平均値を比較するために、対象者を目が気になる悩みの平均値によって高群・低群に分け、2群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とするt検定を行った。その結果、対象攻撃性 ($t(166) = 4.481, p < .001$)、自己破壊行動 ($t(165) = 4.262, p < .001$) に0.1%水準で、自責感 ($t(166) = 3.164, p < .01$) に1%水準で有意差がみられ、高群のほうが高かった。また、積極的行動に5%水準で有意差がみられ、低群のほうが高かった ($t(165) = -2.549, p < .05$)。

4. 2. 2 社会的場面で当惑する悩み

社会的場面で当惑する悩みの高低による攻撃性の各因子の平均値を比較するために、対象者を社会的場面で当惑する悩みの平均値によって高群・低群に分け、2群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とするt

検定を行った。その結果、対象攻撃性 ($t(167) = 2.783, p < .01$) に1%水準で、自責感 ($t(168) = 4.442, p < .001$)、自己破壊行動 ($t(167) = 3.835, p < .001$) に0.1%水準で有意差がみられ、高群のほうが高かった。また、積極的行動 ($t(154.45) = -4.664, p < .001$) に0.1%水準で有意差がみられ、低群のほうが高かった。

4. 2. 3 集団に溶け込めない悩み

集団に溶け込めない悩みの高低による攻撃性の各因子の平均値を比較するために、対象者を集団に溶け込めない悩みの平均値によって高群・低群に分け、2群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とするt検定を行った。その結果、対象攻撃性 ($t(167) = 4.585, p < .001$)、自責感 ($t(169) = 4.351, p < .001$)、自己破壊行動 ($t(168) = 4.554, p < .001$) に0.1%水準で有意差がみられ、高群のほうが高かった。また、積極的行動には5%水準で有意差がみられ、低群のほうが高かった ($t(159.49) = -2.494, p < .05$)。

表2 攻撃性質問紙の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
1. 腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う	.69	-.09	-.02	.15
32. すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたくなる	.65	.00	.19	-.02
6. 腹の立つことをされると、後々まで根に持つほうである	.62	.23	.15	-.10
28. 物事がうまくいかないとイライラして、すぐに人に当たる	.60	.08	.26	.03
16. 特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度をとることがある	.56	.10	.09	.18
5. 他人のことを、心から信頼することはできない	.53	.35	.23	-.13
21. 腹の立つことをされると、にらみつけてやりたくなる	.53	.01	.07	.14
11. 自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない	.49	-.05	.00	-.09
25. 批判や忠告をされると、内心恨んでしまう	.45	.04	.31	-.01
15. 人に対して、疑い深いところがある	.45	.40	.19	-.08
29. 周りの人がなんと言おうと自分の考えは押し通すほうである	.42	-.16	.12	.31
10. 親しみを寄せすぎる人には、警戒してしまう	.38	.13	.28	-.09
13. 他人とのトラブルがあると、自分を責めるほうである	-.07	.73	.02	.05
18. 不愉快なことでも無理に我慢してしまう	-.12	.65	.01	-.01
3. 他人が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと思う	.14	.62	.09	.02
27. 過去のことを振り返って後悔することが多い	.31	.57	.00	-.03
23. 自分はだめな人間だと思う	.16	.55	.36	-.20
8. 何かにつけ、心が傷つくことが多い	.27	.47	.21	.07
30. 他人に調子を合わせすぎて、疲れてしまうことが多い	-.09	.44	.15	-.04
24. 自分の皮膚をかきむしりたくなることがある	.14	.07	.83	-.14
19. 自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなることがある	.11	.13	.77	-.09
9. 自分を傷付けたくなることがある	.21	.23	.64	-.01
20. 周りの人が敵に見えてしまうことがある	.46	.37	.47	.02
4. めちゃくちゃな行動をしたくなるときがある	.33	.26	.38	.16
14. 無我夢中で乱暴な運転(車、バイク、自転車など)をしたいと思うことがある	.20	.00	.37	.12
7. やりたいと思ったことは行動に移すほうである	.01	.09	-.10	.63
2. 自分のやりたい事に向かって突き進んでゆくほうである	-.01	.10	-.08	.57
33. 色んな世間の活動がしてみたい	-.12	.11	-.02	.55
17. 何事にも恐れずに立ち向かっていくほうである	-.01	-.29	.08	.54
12. どちらかと言えば活動的なほうである	-.05	-.15	-.18	.53
26. いつも何か刺激を求める	.13	.16	.29	.53
31. 平凡に暮らすより何か変わったことがしてみたい	.10	-.06	.02	.52
22. 正しいと思うことは人にかまわず実行する	.26	-.17	.08	.49
負荷量の平方和	4.257	3.265	2.966	2.734

4. 2. 4 自分や他人が気になる悩み

自分や他人が気になる悩みの高低による攻撃性の各因子の平均値を比較するために、対象者を自分や他人が気になる悩みの平均値によって高群・低群に分け、2群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とする t 検定を行った。その結果、自責感に0.1%水準で有意差がみられ、高群のほうが高かった ($t(169) = 7.274, p < .001$)。対象攻撃性 ($t(149.37) = 1.960, n.s.$)、自己破壊行動 ($t(151.58) = 1.667, n.s.$)、積極的行動 ($t(167) = -0.569, n.s.$) には有意差がみられなかった。

5. 考察

5. 1 項目分析

5. 1. 1 対人恐怖心性尺度

対人恐怖心性尺度の因子分析の結果、因子構造はほぼ変わらなかったものの、先行研究とは若干違った結果が得られた。まず、本来は自分や他人が気になる悩みの項目であった「自分の事が他の人に知られるのではないかとよく気にする」「人と会うとき、自分の顔つきが気になる」の2項目が、目が気になる悩みの項目になっていた。どちらの項目も、他者の視線からそ

のように感じるという解釈が可能であるため、このような結果になったと考えられる。

続いて、本来は集団に溶け込めない悩みの項目である「人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない」が社会的場面で当惑する悩みの項目になっていた。この項目における大勢の人が会話をしているという状況を社会的場面と捉えたため、このような結果になったと考えられる。

5. 1. 2 攻撃性質問紙

攻撃性質問紙の因子分析の結果、本来5因子構造であるものが4因子構造を示した。まず、対象攻撃行動の全項目と、「周りの人が敵に見えてしまうことがある」以外の猜疑心の項目、本来は積極的行動の項目である「周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通す方である」が1つの因子となっていた。対象攻撃行動の項目は、実際に攻撃したかを尋ねるものではなく、攻撃したいという意味を尋ねるものだったため、攻撃性を保持する傾向である猜疑心と区別されなかったことが考えられる。「周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通す方である」が入っていたことに関しては、自分の考えを押し通すという表現に他者への攻撃性を感じたためと考えられる。

続いて、本来は猜疑心の項目である「周りの人が敵に見えてしまうことがある」が自己破壊行動の項目になっていた。自己破壊行動には、背後に自己への否定的な感情が存在するものと、他者への攻撃性を直接表出できずに自分に向けてしまうものがあると考えられる。この結果は、2つの側面があるということを示しているものかもしれない。

5. 2 対人恐怖心性の高低による攻撃性の各因子の平均値の比較

5. 2. 1 目が気になる悩み

目が気になる悩みの高群と低群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とする t 検定を行ったところ、目が気になる悩みが高い人は、対象攻撃性、自責感、自己破壊行動が高く、積極的行動が低い傾向にあることが分かった。この結果により、目が気になる悩みは攻撃性に影響を与えていることが考えられる。目が気になる悩みは、他者と目を合わせることや他者から見られることに対する恐怖である。他者からの視線を過剰に気にしてしまい、自分への敵意と捉えるために対象攻撃性が、自分が責められていると感じるために自責感や自己破壊行動が高くなったと考えられる。また、積極的行動は他者からの注目を集めやすい側面があるため、目が気になる悩みの高い人は積極的行動が低く

なつたと考えられる。

5. 2. 2 社会的場面で当惑する悩み

社会的場面で当惑する悩みの高群と低群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とする t 検定を行ったところ、社会的場面で当惑する悩みが高い人は、対象攻撃性、自責感、自己破壊行動が高く、積極的行動が低い傾向にあることが分かった。社会的場面で当惑する悩みは人前で上手く振舞うことができないという不安である。上手く振舞えない苛立ちが八つ当たりのような形で他者に向く、またはそのまま自分に向くことによって対象攻撃性、自責感、自己破壊行動が高くなったと考えられる。また、社会的場面で当惑する悩みは内向傾向が強い人に表れやすい悩みであるので、積極的行動が低いのは妥当な結果であると思われる。

5. 2. 3 集団に溶け込めない悩み

集団に溶け込めない悩みの高群と低群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とする t 検定を行ったところ、集団に溶け込めない悩みが高い人は、対象攻撃性、自責感、自己破壊行動が高く、積極的行動が低い傾向にあることが分かった。集団に溶け込めない悩みは集団の中に溶け込んで自由に、適切に振舞えないという悩みである。集団に溶け込めないのは自分に非があるからだと思う傾向があると考えられるため、自責感や自己破壊行動が高くなったと思われる。また、堀井・小川(1996, 1997)によると、この悩みの背後には、自分が集団から疎外されるのではという感情、つまり被害者感情があると考えられており、それが他者への攻撃性に結びついていると考えられる。積極的行動が低いのは、集団に対する違和感や不適合感から率先した行動が取れないためと考えられる。

5. 2. 4 自分や他人が気になる悩み

自分や他人が気になる悩みの高群と低群を独立変数、攻撃性の各因子を従属変数とする t 検定を行ったところ、自分や他人が気になる悩みが高い人は自責感が高い傾向にあることが分かった。自分や他人が気になる悩みは、自分のことを評価する他者への過剰な意識や、評価される自己への過剰な意識を示すものである。評価されることを恐れる背景には、自分の欠点を過剰に気にしてしまう傾向があると思われるため、自責感が高くなったと考えられる。

6. 総合考察

対人恐怖心性の因子ごとに検討した結果、目が気になる悩み、社会的場面で当惑する悩み、集団に溶け込めない悩みの高い人は対象攻撃性、自責感、自己破壊

行動が高く、積極的行動が低い傾向にあり、自分や他人が気になる悩みの高い人は自責感のみ高い傾向にあるという結果が得られた。この結果より、目が気になる悩み、社会的場面で当惑する悩み、集団に溶け込めない悩みの3つは攻撃性の全ての側面と関連しているが、自分や他人が気になる悩みだけは他者への攻撃性、積極的行動とは関連せず、自己への攻撃性、それも自責感のみに関連していることが分かった。このことから、自分や他人が気になる悩みは他の3つの悩みとは性質が違うものであることが示唆された。

自分や他人が気になる悩み以外の3つは恐怖が中心となっているが、自分や他人が気になる悩みは恐怖よりも人から評価されることに対する過剰な意識が中心となっている。他人からの評価を気にする背景には、自分の欠点ばかりに注目してしまうことや、自分が人に迷惑をかけているのではないかという加害者感情があると考えられる。このことから、自分や他人が気になる悩みは加害者感情との結びつきが強い悩みであるため、自責感のみと関連しているのではないかと思われる。

全体として、対人恐怖心性の高い人は他者への攻撃性、自己への攻撃性がともに高く、能動性が低いという仮説どおりの結果が得られた。したがって、対人恐怖心性と攻撃性には関連があることが明らかになった。

7. 今後の課題

本研究の問題点として、質問紙の実施方法が挙げられる。質問紙調査の対象者は、ほとんどが同じ大学の学生であった。1つの大学から多くの回答を得たため、対象者に偏りがあることが考えられる。従って、本研究の結果を大学生全体に一般化することはできない。

また、対人恐怖心性は思春期、青年期に高まることが知られているが、本研究で扱ったのは大学生のみであった。本研究で得た結果が中学生や高校生にも当てはまるのかどうかは、今後検討されるべきである。

本研究において、攻撃性質問紙の因子分析の際に先行研究では別の因子であった対象攻撃行動と猜疑心が1つの因子となってしまう、他者への攻撃性の表出傾向と保持傾向による差について検討できなかった。このような結果になった原因として、質問項目の表現が挙げられる。結果でも述べたように、対象攻撃行動の項目は実際に攻撃したかを尋ねるものではなく、攻撃したいという意味を尋ねるものであったため、猜疑心と分かれなかったことが考えられる。攻撃性質問紙に

ついては、攻撃性の表出傾向と保持傾向が明確となるような表現に改良されるべきである。

最後に、本研究における自己破壊行動の定義の曖昧さについてである。自己破壊行動は、自己に向けられる破壊的で衝動的な行動と定義されている。しかし、自己破壊行動には自己への否定的な感情が背後にあるもの、つまり自責感が行動として表出したものと、他者への攻撃性を直接表出できずに、自分に向けてしまうものの2つがあると考えられる。本研究では、自己破壊行動の2つの側面を明確に分類して対人恐怖心性との関連を検討することができなかった。今後の研究では、自己破壊行動に2つの側面があることを想定して検討されるべきである。

8. 引用・参考文献

- 1) 安立奈歩 2001 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要 47, 475-487.
- 2) American Psychiatric Association 2000 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 2002 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 3) 岩井寛 1982 歪められた鏡像 朝日出版社
- 4) 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学 弘文堂
- 5) 大淵憲一 1993 セレクション社会心理学—9 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学—サイエンス社
- 6) 岡田督 2001 攻撃性の心理 ナカニシヤ出版
- 7) 岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究 60 (6) 386-389.
- 8) 笠原敏彦 2005 対人恐怖と社会不安障害 金剛出版
- 9) 木村駿 1982 日本人の対人恐怖 勁草出版
- 10) 調優子・高橋靖恵 2002 青年期における対人不安に関する研究—自尊心、他者評価に対する反応との関連から九州大学心理学研究 3, 229-236.
- 11) 調優子 2004 対人恐怖の心性と二面性に関する研究 日本青年心理学会大会発表論文集 12, 50-51.
- 12) 田中康裕・穂苅千恵・福田周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究 12, 2, 121-131.
- 13) 津田佳子 1998 青年期と中年期における対人恐怖の心性の比較—自尊心、タイプA行動パターン、攻撃性からの検討—名古屋大学教育学部紀要. 心理学 45, 209-210.
- 14) 鍋田恭孝 1997 対人恐怖・醜形恐怖 金剛出版
- 15) 西川勝利 2005 青年期における対人恐怖心性と自尊心の関連について 愛知学院大学文学部紀要 35, 251.

- 16) 西村美咲・井上健 2008 対人恐怖における優越コンプレックスについて 臨床教育心理学研究 34, 1-6. (続報) 上智大学心理学年報 21, 43-51.
- 17) 堀井俊章 1995 青年期における対人恐怖心性—心的時間軸による理解— 日本性格心理学会大会発表論文集 4, 66-67.
- 18) 堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報 20, 50-55.
- 19) 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖心性尺度の作成 20) 李秀・永江誠司 2005 青年期における自己愛と対人恐怖心性が攻撃性に及ぼす影響 教育実践研究 13, 145-152.
- 21) 山下格 1977 対人恐怖 金剛出版
- 22) 山下格 2009 対人恐怖と日本の社会 こころの科学 147, 14-17.

大学生の対人恐怖心性と攻撃性の関連について

Relationship between Anthropophobic Tendency and Aggressiveness in University Students

太 宰 瑞 希*・佐 野 秀 樹**

Mizuki DAZAI and Hideki SANO

教育心理学

Abstract

This study aimed at examining relationship between anthropophobic tendency and aggressiveness in university students. Questionnaires were completed by 175 university students. Results of analysis are as follows.

1. Students who have strong anthropophobic tendency have strong aggressiveness to others, self-reproach and self-destructive behavior and weak positive behavior.
2. Students worry about fear of other's eye, embarrassment in social situation and impossibility to adopt themselves to group have strong aggressiveness to others, self-reproach and self-destructive behavior and weak positive behavior. Further, students worry about themselves and others have strong self-reproach.

Future tacks are examining on high school students and junior high school students, improving of questionnaire about aggressiveness and reviewing of definition of self-destructive behavior.

Key words: university students, anthropophobic tendency, aggressiveness

Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、大学生における対人恐怖心性と自己への攻撃性、能動性を含めた攻撃性の関連を検討することである。大学生175名を対象に、質問紙調査を行った。分析の結果、以下のことが明らかになった。

1. 対人恐怖心性の高い人は対象攻撃性、自責感、自己破壊行動が高く、積極的行動が低い傾向にある。
2. 目が気になる悩み、社会的場面で当惑する悩み、集団に溶け込めない悩みの高い人は対象攻撃性、自責感、自己破壊行動が高く、積極的行動が低い傾向にあり、自分や他人が気になる悩みの高い人は自責感のみ高い傾向にある。

今後の課題としては、高校生や中学生における検討、攻撃性尺度の質問項目の改良、自己破壊行動の定義の見直しが挙げられる。

キーワード: 大学生, 対人恐怖心性, 攻撃性

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)